

香の物と云、味噌はにをひ高き物ゆへ、異名を香ともいひしなり、上膳名の記に、たれみその汁をかうの水の女の詞にいふよしみへたり、みその水と云事也、

〔於路加於比下〕香物

香物は室町殿の頃より、專湯漬の膳につくる事今の如し、祇園會御見物御成記大永三年、義晴將軍の獻立に略 御ゆづけ たこ、やき物、このわた、あへませ御ゆづけ、かうの物、かまぼこ、ふくめ鯛、三好筑

前守義長朝臣亭江御成記永祿四年三月、上下一總衆へ參獻立、小西仕分、御湯漬二百膳、しほ引

あわびしほ、やきもの、あへませ、めし、かうのもの、略中 自餘朝倉亭御成記永祿十一年五月一文祿四年御成

記秀吉等の獻立皆同じ、猶古くは四條流庖丁書長享三年二月、多治云、メシノ大汁ニビブツ美物

ヲスル事不可難、當流ニハ有之、次ニサバザラ散飯皿也ニ香物以下ノ物ドモヲ盛事ハ、廿餘年以

來ノ事也、古ハ自然ヤキシホ山椒ナド少シ置タル歟、勿論ヤキシホナド不入トモ、只サバ皿ヲバ

可置也ト云々上下などあり、故友深川元儻云、香物は大根の味噌漬に限る事也、按ふに瓦礫雜

考にもいわれし如く、新猿樂記の香疾かたやき大根とあるが、香の物と女詞にいへるが原なるべく、香を

賞したる名なめるを、同人又云、薩摩の女詞に、味噌汁をかうの水といひ、おこうをたてるなどい

ふを思へば、かうは羹の音にて、香は借字なるべしといへり、こは大土膳御名之事と目を題たる

室町殿時代の書に、女房言一しる、しるのしたりのみそをかうの水といふとあると同じく、げんか羹

の字音にやとも思われるれど、味噌を指てた、にかうとは稱ふべからねば、かうは香々の音便と

して可也、略註 猶薩摩人は大根漬をのみかうの物と、今も稱よし元儻いへりき、猶延喜式に、漬菜

蕪根漬、未醬茄子、醬瓜、漬糟冬瓜、漬蒜、漬蜀椒の類、程々見ゆれども、だいこんの漬たるは、載られざ

れば、上代にはせざりし事にや、件の女房語に、一かうの物をかうのふりとある、ふりは瓜にや、又

尾張國海東郡阿波手杜なる藪の香物は、今も毎年熱田神宮二月巳午祈新十一月寅卯祭新十二月正月

祭